

OKoTaC 通信

2018年4月30日発行

NO.40

オコタック



P 2 NPO活動報告

『ともにいきるシンポ〜多民族社会「日本」のこれから〜』
『高校生活オリエンテーション』

P 3 地域の子ども支援教室から⑩

『Tabunka Juku (たぶんかじゅく)』(大阪市西区・西淀川区)

P 4 特別寄稿

『「こどもひろば」によるダイレクトへの高校入試支援(前篇)』

P 5 Air Mail メキシコ便り⑩

『ベリーズ(前篇)』

P 6 多文化な子ども@大阪のニュース

『〜海外から日本へ〜大阪の高校に学ぶ若者たち』

P 7 特別寄稿

『多言語電子絵本で日本語も母語も育ててほしい』

P 8 総会のお知らせ



おおさか子ども多文化センター 活動報告

オコタック共催事業 『ともにいきるシンポ ～ 多民族社会「日本」のこれから～』



3月21日(水・祝)、アネックスパル法円坂で、オコタックメンバーである「子どもの夢応援ネットワーク」(注)主催の上記のイベントが開催されました。外国にルーツをもつ子ども・若者を取り巻く社会環境は非常に厳しい状況があります。その



ような中で、教育や就労に関して、子ども・若者の夢を育み、実現するための支援の輪を広げ、サポート体制の充実と、法や制度づくりに必要なものは何かを、参加者の皆さんと考える機会を得たいと、この会を開催しました。当日の参加者は149名で、社会活動家の湯浅誠さんによる講演のあと、湯浅さんとフィリピン、ネパールルーツの若者たちとのパネルディスカッション、そしてそれを受けて、参加者全員を班わけしてのテーブルトークと、盛りだくさんの内容でした。今回のイベントは参加者のアンケート結果でも、高い評価をいただきました。参加された重安義行さんに感想を寄稿していただきました。(Y.H)

(注)「子どもの夢応援ネットワーク」とは

2016年夏から外国につながる子どもたちを支援している個人、団体の有志が勉強会を重ねて、17年夏、ネットワークを結成しました。お互いが直面している課題を共有して、問題を解決するための次のステップを踏み出したい、だれもが住みやすい社会を実現するために、ともに知恵を出し合い、行動につなげていくゆるやかな連携の場を目指しています。おおさか子ども多文化センターも、設立初期から参加しています。

『ともにいきるシンポ～多民族社会「日本」のこれから～』に参加して

重安義行(たぶんかじゆく数学講師)

湯浅さんの講演にあった3重の傘の話は分かりやすかったです。3つの傘とは、上から国の政策の「傘」、企業の「傘」、家族の「傘」をいいます。この傘が一般の人々を貧困化から守る社会的システムとして存在していました。しかし、1990年代前半のバブル崩壊とともに、この傘が閉じられるという状況になりました。そして傘が閉じてくることで、傘に入りきれない人々が増え、貧困が増えるという貧困化の構造について説明されましたが、外国人の労働者家族は、この傘外の人々で、様々な恩恵が行き渡らないという現状があります。私は現在、外国ルーツの中学生に放課後、学習支援をしています。このことを強く感じています。例えば、日本に住む子どもたちはだれでも教育を受けることができますが、この子どもたちは言葉の壁で日本語の授業を聞いても理解が難しく、多くのリスクを抱えています。しかし学校では教員が多忙なため特別に指導はできないし、それを補償する取り組みもありません。またパネルディスカッションではフィリピンルーツのラボルテ雅樹さん、ネパールルーツのラクシミ・サブコタさんの日本での学校生活と、その後の就職の経過などの苦労話など詳しく語ってもらい、非常に参考になりました。この子どもたちが将来の日本を背負う人間となっていってくれることを期待しています。湯浅さんの講演、パネルディスカッションや最後にグループに分かれ参加者同士の悩みなど意見交換を通して、私は少しでも子どもたちに支援ができればと思いました。

オコタック受託事業 『高校生活オリエンテーション』



3月24日(土)13時から、今宮工科高校で高校生活オリエンテーションが開催されました。これは、府立高校に合格が決定した帰国・渡日新入生および保護者を対象に、高校生活に必要な情報提供をするものです。今年度は、新入生が17名、高校は7校の参加申し込みがあり、中国・ネパール・フィリピン・韓国語の通訳も参加しました。学校生活のルールや支援制度、内容が難しい就学支援金・奨学金について説明があり、卒業生から進学についての体験談なども聞きました。4月からの新生活が安心して始められる手助けになればと思います。(K.N)



『Tabunka Juku(たぶんかじゅく)』(大阪市西区・西淀川区)

2003年4月、高校に送り出した卒業生からの「先生、まだまだ日本語がわかりません！教えてください！」という声に後押しされて、高校生・中学生・中学校を卒業してから来日した子どもと始めた学びの場をきっかけに、外国につながる子どもの居場所と学習支援の場づくりとして「サタデークラス」が始まりました。それと並行して、10年後の2013年12月、大阪市塾代助成事業始動に合わせて「TABUNKA SHINGAKU JUKU(たぶんか進学塾)」が開講され、5年後の今、「Tabunka Juku(たぶんかじゅく)」として6期生を迎えています。生徒は随時募集していますので、いつからでも参加できます。

今年度からは、おおさか子ども多文化センターの事業となり、現在は「Tabunka Juku 新町教室」に加え、「Tabunka Juku “Animo”(アニモ)」の2教室で展開しています。

大阪市西区の新町教室では、中国、アメリカ、ネパールにつながる中1～中3生たちが日本語クラス、数学クラスで学んでいます。一方スペイン語やポルトガル語でがんばるという意味のある「アニモ」は西淀川区出来島で、ブラジル、ペルーにルーツをもつ中2・中3生が、日本語・英語・国語を、それぞれが選択して学んでいます。また、「アニモ」はブラジルやペルー、フィリピンなどからの当事者も参加して編成した地域支援団体「西淀川インターナショナルコミュニティ(NIC)」の活動の一環である学習支援教室「きらきら」と連携して、中学生を受け入れています。



塾に来る生徒のほとんどは、月に1万円を上限に月謝の助成が受けられる塾代助成カードの使用を希望しますが、ルビのない申請書をきっちり書き投函するまでは、日本語能力が十分でない彼らには大変なことです。仕事で忙しい親にポストへの投函を頼まれた子どもが入れ忘れたため、締切りを過ぎてしまったなどということも起こり、申請書を書くことから、ポストに切手を貼って入れるまでの細かいサポートが必要なのです。特に最初の申請は、受理されてから発効までに2か月かかります。うっかり各月の締切日を過ぎると、助成が受けられるのは3か月後になってしまうのです。

さらに、そもそも申請以前に、塾代助成の制度がなかなか伝わっていないという問題があります。大阪市のホームページにはやさしい日本語、英語、韓国・朝鮮語、中国語の説明がありますが、まず、この制度の存在を知らせ、次にホームページで検索するためには「じゅくだいじょせい」とか「jukudai josei」で探すようにと教えるサポートが必要なのではないのでしょうか。

このように、あれやこれやで塾は大変な上、赤字続きです。しかし、既に45名以上の子どもたちが公立・私立・専門学校等に進学していきました。今後も進学へのよりよい橋渡しとなるよう努力するつもりです。新しく、おおさか子ども多文化センターの事業となった、たぶんかじゅくを、これからどうぞよろしくお願いいたします。そしてよろしければご寄付等のご支援もあわせてよろしくお願いいたします。(たぶんかじゅく 坪内好子)

【新町教室】

場 所： 大阪市西区新町1丁目 12-23 イサオビル4F

日 時： 毎週金曜日 17:00～18:20 日本語、18:30～20:00 数学（英語ご希望は別途ご相談）

【アニモ】

場 所： 大阪市西淀川区出来島1-13-2 ゆうせい薬局2F ゆうせいホール

日 時： 毎週月曜日 17:30～19:00

日本語／英語／数学のどれか1教科(2教科以上のご希望は別途ご相談)

※両教室とも、

参加対象： 中学生、母国の中学校既卒生

問合せ先： NPO 法人おおさか子ども多文化センター「Tabunka Juku(たぶんかじゅく)」

E-Mail: tabunkajuku@gmail.com Tel: 06-6586-9477 (担当:坪内)

特別寄稿『「こどもひろば」によるダイレクトへの高校入試支援』(前篇)

こどもひろば 事務局長 鵜飼聖子

編集部より

近年、外国人の高校進学率の低さが、関係者の間で大きな課題として考えられるようになりました。全国的な統計調査の行われていない中で、この分野で著名な研究者は、文科省の「学校基本調査」などのデータを駆使して 60%前後であると推定しています。日本語指導の必要な生徒に限ると、さらに低くなると容易に推察されます。そんな中で先進的な取り組みをしている地域として神奈川県、愛知県、三重県などに加え、大阪もその一つに数えられています。大阪府教育庁が毎年、口頭で発表するデータでは中学3年生の日本語指導が必要な生徒の高校進学率は 2016 年では 95.1%であり、一般の生徒の進学率の 98.4%に迫る状況でした。しかし、この数字には今回のテーマであるダイレクト生が含まれていないという問題があり、これだけで大阪の「先進性」をいうことはできませんが、他の地域に比べ、ましな状況であることはいえます。この状況を作り出したのは、「特別枠」などの教育システムもありますが、地域のボランティア団体の支援も大きな役割を果たしています。ここで紹介する「こどもひろば」もその一つです。「こどもひろば」については、本誌2号で紹介した学習支援活動に加え、ダイレクトが高校受験するために必要な「資格審査」も支援されています。今回はこの「資格審査」にいたるまでを、鵜飼聖子さんに報告していただきました。

“ダイレクト”、海外の中学校を卒業して直接日本の高校に入学してくる子どもたちを大阪ではそう呼ぶ。「こどもひろば」は 2005 年の活動開始以来、80 名を超えるダイレクト受験生を支援してきた。その支援活動は学習支援にとどまらない。高校に入りたいという相談を受けたその日から合格の瞬間まで、彼らを支え、ともに歩む。

子どもたちのルーツは多様だ。中国、韓国、台湾、タイ、フィリピン、イラン、パキスタン、ネパール等々。子どもたちは日本語が全く話せないことが多い。保護者は先行して来日する例が多く、その日本語のレベル



事前相談の様子

はいろいろだが生活日本語でしかなく、特に非漢字圏の場合の多くは日常会話ができるくらいだ。そんな親子が春からポツポツと相談にやってくる。公立高校入試(特別選抜)は2月下旬だが、今年は1月2日中国から来日、とある高校に相談に行くと「こどもひろば」を紹介されたというダイレクト受験生もいた。このように準備期間が短い生徒でも出願できるように、後段にあるような手続きに奔走することもよくある。

高校に行きたいと相談があった場合は、まず母国での修学歴の確認と日本での進学意志を確かめ、高校入試の制度と日程を説明する。日本人と全く同じ試験問題だと説明し、実物を見せる。必要なのは学力と得点力だ。つまり題意を理解し、正答しなくてはならない。競争があるのだということをはっきり伝える。

日本語もほとんどできない来日直後の子どもたちなので、目指すのは特別枠と言われる「日本語指導が必要な帰国生徒・外国人生徒入学選抜」「海外から帰国した生徒の入学選抜」などだ。教科を英語と数学に絞って、日本語との3つが学習支援活動の中心となる。

学習支援は文字指導を含む日本語の導入と同時に、数学の計算の練習から始める。母国の教科教育は日本と同じではないので、何が既習なのか調べながら進める。英語も英問英答の問題で実力を測りながら進めていく。本人の持っている実力が発揮できるようにするのが目標だ。

子どもたちは学習機会を確保するために地域の日本語教室や支援教室を巡ることもある。こどもひろばも週1回の教室だけでは受験勉強には時間が足らず、学習も定着しないので、受験勉強に限定した補習教室も開催している。

子どもたちは学習(日本語と受験勉強?)に取り組む一方で「資格審査」という手続きを進めなくてはならない。大阪府の公立高校を受験するには教育委員会の承認が必要なのだ。卒業証明書などの書類をそろえて申請しなければならない。スタッフが保護者と一緒に準備し申請に同行する。(次号では具体的な資格審査における支援の様子を伝えます)



海外からのたよりをお届けします～

メキシコ便り③⑧ 「ベリーズ(前篇)」

(おおさかこども多文化センター会員・金野広美)

まるで生きているかのようなティカル遺跡のジャングルからフローレスにもどり、バスで5時間のベリーズ・シティへ行きました。ベリーズはカリブ海に面し、グアテマラ、メキシコと国境を接した、四国よりやや大きい国で、3ヶ月以内の観光旅行でも日本人はビザが必要です。グアテマラの旅行社にツアー代金を払う時、ベリーズのビザは国境で取るつもりだと言うと、何の問題もないというのでここで契約したのですが、次の朝、迎えに来た運転手は私に「日本人か、ビザは持っているか」と聞くので、私が「持っていない」と答えると即座にいやな顔をして、「1時間は余計に時間がかかる」と、はき捨てるように言うのです。私はムカッとしながらもバスに乗り国境に着きましたが、国境は長い列。バスを降りるとき、運転手に「私



はフローレスからベリーズ・シティまでのバス代を払ったのだから待っていてくれますね」と言うと、「知らん」とけんもほろろなのです。いくら抗議をしても「知らん、待たん」というばかり。私は頭にきたのですが、こんなことで時間をとってますます遅くなるだけなので、なんとかならだろうと国境のイミグレーションの長い列に並びました。同じバスに乗っていたフランス人はビザがいりません。私とそのフランス人に「どうしてフランス人はビザが必要なくて日本人はいるの」と、つい怒りを彼にむけてしまいました。すると彼は「それはフランスが力を持っているからだ」と答えたので怒り倍増。「くそー、これ

は単なる差別やー」と彼に言ってしまいました。腹をたてながらも別室で50ドルを支払い外に出ると、なんとさっきのいじわる運転手が近づいてくるではありませんか。やはり契約通り待っていたのです。待つのならなぜあんな客を不快にさせることを言うのか、まったく理解できません。グアテマラの観光業にかかわる人間のマナーの悪さには、もう閉口です。

国境からベリーズ・シティまでは3時間、そこから船で40分のカリブ海に浮かぶ全長7キロメートルの細長い島、キーカーカーに行きました。カリブ海を眺めながらの椰子の木陰での昼寝は、これまでの1泊ずつの移動や、途中でたたき起こされた夜行バス、国境でのバス運転手とのいざこざなどですっかり疲れ果てていた私を、ちょっぴりよみがえらせてくれました。

よく眠ったあくる日、すっかり元気になった私はシュノーケリングをするために船で出かけました。海は透明で、たくさんのかわいらしい魚やエイを見ることができました。特にエイはまったく人間を怖がらず、ガイドに抱っこされるのでびっくりです。このあたりは海洋保護区になっていて捕獲は禁止されているので、すっかり安心しきっているのでしょうね。

夜になりロブスターを食べにホテルの近くのレストランへ。このあたりはロブスターを売る店が軒を連ねています。全長30センチほどの大きなものでも25ドルです。焼きたてのロブスターと冷えたビールは本当に最高で、すっかりカリブ海に元気にしてもらいました。





多文化な子ども @ 大阪のニュース

ボランティア・市民活動情報誌『COMVO (コンボ)』連載

「～海外から日本へ～大阪の高校に学ぶ若者たち」

編集部より

オコタツクの事業の一つに「高校生による訪日観光客への通訳案内ボランティア活動」がありますが、この春で3年を数えました。当初、全く暗中模索の中、まさに「わらをもつかむ」思いで相談こうがったところが大阪市ボランティア・市民活動センターでした。多くの職員のみなさまが懇切丁寧にアドバイスをしてくださり、この企画を始めることができました。ここがなければ、私たちのボランティア活動は実現しなかったと言っても過言ではありません。

さらに、一昨年から情報誌『COMVO』にも、外国につながる高校生を紹介する連載をしていただいています。そこで今回は、大阪市ボランティア・市民活動センターの縄さんに、このページについて紹介していただきました。



等身大の高校生の声を

大阪市ボランティア・市民活動センター 縄 美都子

ボランティア・市民活動情報誌「COMVO(コンボ)」は、1994(平成6)年に大阪市ボランティア・市民活動センターが創刊したフリーペーパーです。2014(平成26)年からは市民によるボランティア記者が取材や記事作成を行い、市民参加で作っています。

「COMVO」と外国にルーツのある子どもたちとの出会いは、今から3年前。2015(平成27)年から始まった地下鉄主要駅での「通訳ボランティア活動」の取材がきっかけとなりました。地下鉄のサービスマネージャーと協力し、訪日観光客に声をかけ、路線や目的地へのアクセスなど、母語を活かして、真剣に案内する姿と、活動後の自信に満ちた彼らの表情が印象的でした。

昨今、大阪への訪日客数は全国平均を大幅に上回り、増え続けていますが、当時、社会のニーズをいち早くとらえた通訳ボランティアは先進的な試みでした。「外国にルーツをもつ子どもたち」の存在をより多くの市民に伝えたい」というおおさか子ども多文化センターの想いに共感し、当センターとしても、継続的に発信する必要性を感じ、2016(平成28)年から「府立高校に学ぶ若者たち」の連載をスタートさせました。

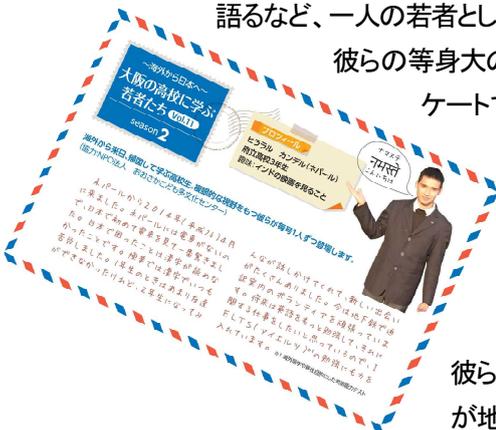


この欄では、毎号、1人ずつ登場する高校生が文章を書き、写真も掲載しています。習慣も文化も違う中、言葉の壁にぶつかり、悩みながらも大阪の高校で勉強し、部活動や趣味に打ち込み、友人とのおしゃべりを楽しみ、将来への夢を語るなど、一人の若者として様々な想いを綴っています。

彼らの等身大の姿、清々しい表情に、読者は親近感を抱いているのでしょう。読者からのアンケートでは「応援しています」「彼らは若々しく、元気もらっています」など、市民からの声が寄せられています。

また、これらの縁がきっかけとなり、昨年開催したセンター開設30周年事業での「多文化共生～内なる国際化～」という分科会では、海外から来た子どもや大人が集まり、それぞれにご登壇いただきました。

彼らが紡ぎだす言葉を私たちの情報誌で発信していくことが、隣に住む彼らの存在が地域で受け入れられ、彼らが市民の一員として垣根を超えていく“内なる国際化”に繋がっていくことを願っています。





特別寄稿 『多言語電子絵本で日本語も母語も育ててほしい』

多言語絵本の会 RAINBOW 代表 石原弘子

編集部より

”多言語絵本の会 RAINBOW“代表の石原弘子さんは、長年東京で、絵本を使った多文化交流活動やマルチメディア DAISY の多言語版の作成・普及に取り組んでおられます。オコタツクの事業に対してもいろいろご協力くださっている石原さんに、これまでの活動の振り返りと、多言語電子絵本の意義や可能性についてご寄稿いただきました。

.....

多言語電子絵本を作るという考えは、2003 年、フィリピン出身のお母さんが「日本では、私の言葉は必要ない」というのを聞いたことから始まりました。これは違うと思ったのですが、当時は何もできませんでした。2009 年に、目黒区が子ども条例の絵本「すごいよ ねずみくん」を刊行し、これを見た途端、日本語だけでなく多くの外国の方にも読んでもらいたいと思いました。そこでまず4言語に翻訳してもらい、その後、音訳し、文字と音を合わせてマルチメディア DAISY にし、2015 年には YouTube で視聴できる電子絵本にしました。

多言語で楽しめる電子絵本として現在までに当会が作った作品は現在、15 作品、150 タイトル以上になっています。日本昔話や「かずのほん」「ごんぎつね」「長崎の原爆」など多様です。原作者の使用許可を得た作品ばかりで、日本昔話6話は文も絵もプロの方の好意で使わせていただいています。

そのなかで「ええぞ、カルロス」は、大阪市教育委員会の第8回「人権絵本原作コンクール」優秀作品です。



地域の中学校で上映されるDVD

2005 年に発刊され、おおさか子ども多文化センターは 2014 年、この本を多言語マルチメディア DAISY にされました。その後、当会が YouTube で視聴できる動画に制作し、2017 年にはテレビで視聴できる DVD にもなりました。印刷の絵本が電子絵本になることで、「ええぞ、カルロス」は多くの地域の方たちも読めるようになりました。愛知県のある学校の先生は、多文化フェスティバルで上映されたそうです。集団で視聴することで、この作品の良さや訴えが共感、共有されたことと思います。

また、東京都人権プラザでは、「読む人権 じんけんのほん 2017-2018」という催しを1月13日から3月24日まで主催、展示しました。当会は、多文化共生がテーマの本を 20 冊紹介するように依頼され、私は一番に「ええぞ、カルロス」を挙げました。

当会では、多くの方に多言語電子絵本のことを知っていただきたく、今春、サンプル DVD を作り、欲しい方に無料配布することにしました。現在約 500 枚を送る予定です。また、今年度は、5か国(韓国、台湾、中国、ベトナム、インドネシア)の昔話に加え、小学校1年生の教科書に取り上げられている新美南吉の「あめだま」も9言語で作ります。それぞれの国では誰もが知っている話を電子絵本にすることで、各国の文化がより身近なものになると考えています。

そんな当会にはさまざまなメールが寄せられます。「HP に掲載されている作品に子どもが感動した」、外国人児童の支援者からの「こんなのが欲しかった」「日本の子どもなら誰でも知っている昔話を、外国につながる子どもが知らないので送ってほしい」など、多くの地で多言語電子絵本が希望されていることがわかりました。このような多くの声を受け、当会は活動を展開していきますが、東京都在住外国人支援事業助成が受けられると、都内の小学校に DVD を配布することが可能になるのでは？と密かに期待しています。





オコタックからのお知らせ

2018年度オコタック総会、特別講演

NPO 法人おおさかこども多文化センター(オコタック)の2018年度総会を、開催いたします。

正会員は総会への参加・議決権、賛助会員は参加権があります。

今年も議案審議のみの総会だけではなく、総会後に会員交流・情報交換を兼ね下記のような特別講演を予定しております。

講師の中尾卓司氏は、昨年結成されオコタックも参加している「子どもの夢応援ネットワーク」の発起人です。結成の経過や外国につながる子どもの支援などへの中尾さんの思いを語っていただける予定です。

日時：2018年5月26日(土) 10時～12時

場所：ヒューライツ大阪セミナー室

大阪市西区西本町1丁目7-7 CE西本町ビル8階

オコタックが入っているビルの同じフロアです

時程：10時00分 総会

2017年度事業報告・決算報告

2018年度事業計画等、その他

10時30分～12時00分 特別講演

演題 「子どもの夢応援・新聞記者と考える」

講師 中尾卓司 (毎日新聞エリア報道センター次長)

プロフィール

1966年 兵庫県篠山市生まれ

1990年 毎日新聞社入社。

社会部、外信部、ウィーン特派員、岡山支局次長、

社会部編集委員などを経て、今年4月から現職。

* このセミナーは、オコタック会員以外でも、会員の紹介があれば、参加することができます。



NPO 法人 おおさかこども多文化センター (OKoTaC) 代表 濱名猛志

〒550-0005 大阪市西区西本町 1-7-7 CE 西本町ビル 8階

Tel / Fax 06-6586-9477

E-mail osakakodomo@gmail.com URL http://okotac.org

郵便振替 【記号・番号】00940-1-272824

(他金融機関からは【店名】〇九九(ぜ けい けい けい))

【店番】099【預金種目】当座【口座番号】0272824)

口座名義『NPO法人 おおさかこども多文化センター』

[フリガナ: トクヒ] オオサカコドモタブンカセンター]

